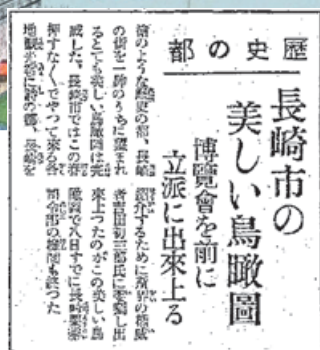




(大阪毎日新聞／昭和9年2月9日)



景勝の長崎

長崎市鳥瞰図

文・藤本一美

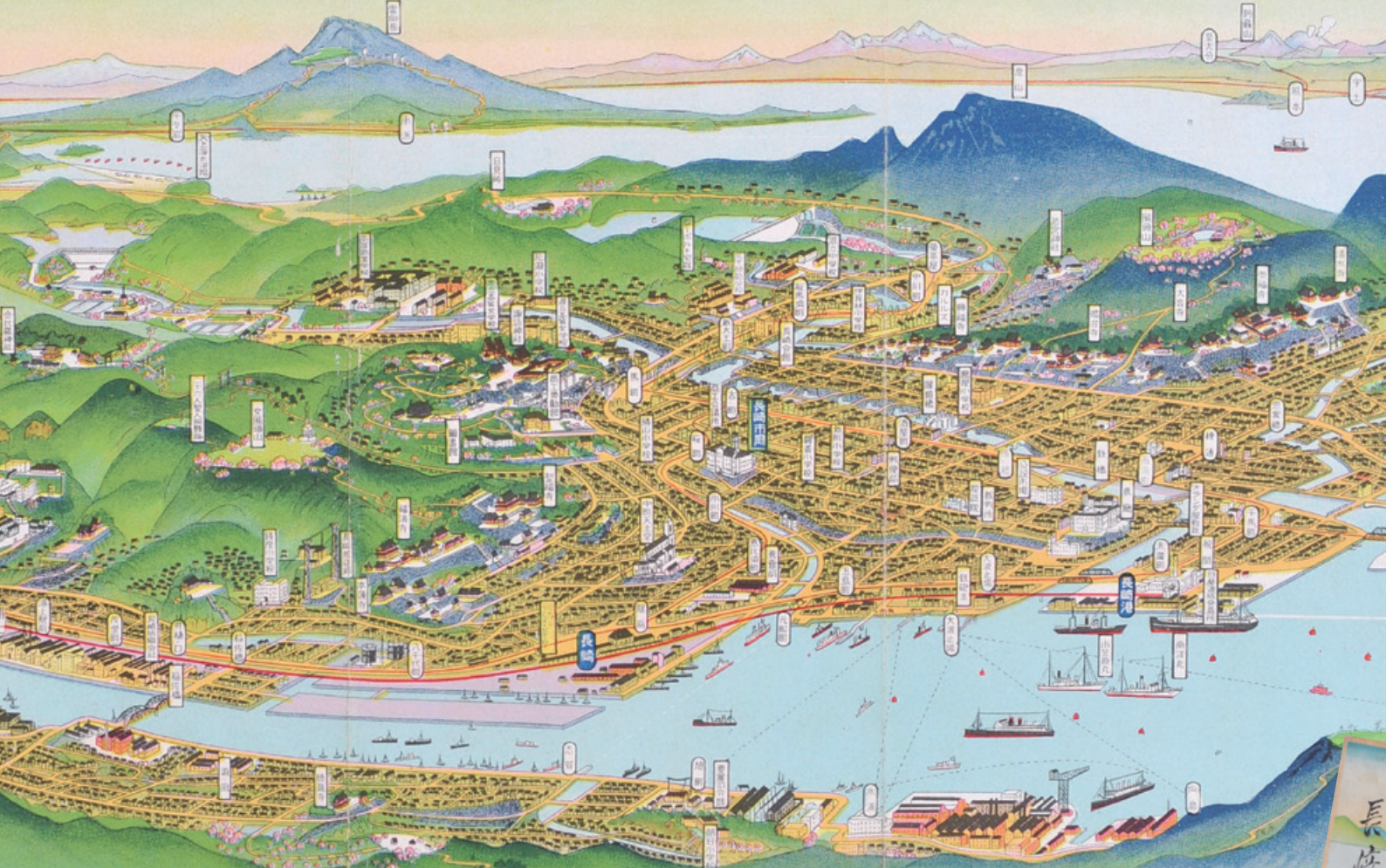
text by Kazumi FUJIMOTO

異国情緒溢れる長崎の街並みとその周辺が、吉田初三郎鳥瞰図絵作品になったのは、昭和九年（原画は昭和八年）一月のことである。当時の大阪毎日新聞二月九日号によると、博覧会開催を前に初三郎に依頼したという。これは長崎市主催の国際産業観光博覧会（同年三月二十五日～五月二十三日開催）のことで、市の予算は五十万円。市内中ノ島、浦上川河口の埋立地が第一会場、第二会場が雲仙になったのは、国立公園に選定されたのを契機に、市中から雲仙への遊覧構想の願いを実現したかったからに他ならない。

鉄道交通手段の長崎本線や市中を走行する長崎電気軌道の路面電車が縦横に図示されているのはそのためであろう。路面電車会社の創立は大正三（一九一四）年八月二日。谷戸の市中東西に延びる大橋―思案橋間の本線、南北の桜町支線、蛸茶屋支線が図示。戦後の高度成長期には、赤迫や正覚寺下まで延伸している。

藤本一美

首都大学東京・専修大学非常勤講師。地図情報センター理事。日本地図学会評議員。鳥瞰図・展望図資料室兼山岳情報資料室主宰。近・現代の鳥瞰図絵師の作品収集と研究に精力的に取り組んでいる。著書に『旅と風景と地図の科学Ⅱ』（私家版2006年）、最新刊に『展望の山50選 関東編』（東京新聞出版局）がある。



『景勝の長崎 [長崎市鳥瞰図]』

(昭和9 (1934) 年1月25日)

長崎市観光誘致協会 発行

京都市内の観光社出版部 印刷

長崎市内の移動を支える`市民の足、`観光の足、 歴史ある街を走るレトロ&モダンな路面電車



長崎電気軌道株式会社

Nagasaki Electric Tramway Co., Ltd.

創立：大正3 (1914) 年8月2日

営業開始：大正4 (1915) 年11月16日

本社：長崎市大橋町4番5号

長崎電気軌道は、大正4 (1915) 年の病院下電停一築町電停間3.7kmの開通に始まる路面電車。原爆投下、長崎大水害などの苦難を乗り越え、現在では総延長11.5km、四つの主要系統とその他の一つの系統で1日当たり平日1122本、休日1064本の電車を運行しています。

また、明治44 (1911) 年生まれの168号から、最新の超低床式路面電車5000形まで、22種類75両にもなる車両が運行。レトロ&モダンな路面電車が市内観光の目玉の一つとなっています。

平和公園や原爆資料館、大浦天主堂、グラバー邸など、長崎の主な観光名所は、ほぼすべて沿線に点在しており、観光客の多くは路面電車に乗って長崎観光を楽しんでいます。



「地図遺産」ともなるであろう。

まさに初三郎は戦前の生き証人、

それを長崎が、昭和二十年八月九日、原爆投下被災地となり、悲しみと苦しみの歴史を背負いながら復興を遂げてきた。私は修学旅行で生徒たちを引率し、歴史と観光に生きる姿を学んだことも。出島オランダ屋敷跡や眼鏡橋、グラバー園、シーボルト宅地跡、浦上天主堂、爆心地などを訪れたことを思い出す。

リアス式海岸（近年はリアス海岸）の湾内には、数多くの船舶が浮かぶ国際観光都市でもあることがわかる。

大胆な構図は、稲佐山（三三三m）上空から眼下の長崎市街を中央に大きく描写。背後に雲仙岳と阿蘇山カルデラを配置。両端遠景には、いつものことだが、中国大陸の上海・大連や東京、富士山まで入れている特異性が楽しめる。

さて、昭和八年十二月十二日長崎要塞司令部検閲済の印字が奥付や図隔右端、裏表紙にあり気になるところ。昭和六年の満州事変前後から、ダム貯水池名や造船所名、軍事施設など、あるいは海水浴場のある砂浜海岸は敵の上陸地点になり得るというところでカットに。路面電車は一両だけだが描画していて嬉しい限りだ。